

1. ホ・ジノ『満ち足りた家族』(2023) (英語タイトル『A NORMAL FAMILY』)

原作はオランダの作家で俳優でもあるヘルマン・コッホ(1953-)の「THE DINNER」(「冷たい晩餐」という小説で、2017年にアメリカでオーレン・ムーヴァーマン監督、リチャード・ギア主演で、原作と同じタイトルで映画化されています。筆者はこの作品は見ていませんが、どうも不評だったようです。(日本公開は2018年のこと)

本作品は、非常に見応えのあるクライム・ホームドラマであり、おそらくは一般的に多くの支持を集める作品になるものと推察されます。それだけ社会に問うべき問題を提起しているということです。弁護士と医師という兄弟のそれぞれの家庭で、子どもたちの起こした凶行に両親たちがいかに対処するか、厳しい選択を迫られることになります。(前作では上院議員と教師という設定のようです)

ホ・ジノ(1963-)は両親たちを追い詰めていき、職業上の倫理観と人間としての倫理観と正義感の重大性を強く訴えます。そのあたりを丁寧かつ骨太に何らブレることなく描いていきます。作品へのコミットメントの強さが伝わります。カメラも忠実にストーリーの展開を追って行きます。過不足ない表現です。

子どもたちの置かれた環境(学校、いじめ、受験地獄、家庭問題、反抗期などなど)は、どの国でも非常に難しい問題として存在します。ホ・ジノの目の付け所は、どこででも起こりそうなものとして社会を等身大として描くところがあり、このあたりに見る側との距離の取り方の適切さが表れているような気がするのです。(日本の小学校を通じて日本人の生き方を描いた、この作品の公開時期に偶々山崎エマ(エマ・ライアン・ヤマザキ)監督の『小学校』(『THE MAKING OF JAPANESE』)も公開されていましたが、このドキュメンタリー作品の評価については議論の余地が多々あることだけをここで述べ、留めておくことにします)

この作品の持つ緊張感を保つ上で、四人の主演俳優は確実な演技を行い、またシナリオも十分に練られた感があり、プロットの布石の置き方は見事に決まっている。ホ・ジノの力量を十分に感じ取ることができた作品でもありました。(主演は、ソル・ギョング、キム・ヒエ、チャン・ドンゴン、クロード・キム、撮影はコ・ナクソン、脚本はパク・チュンソク)

2. 木下恵介『女』(1948) 松竹大船/松竹作品

日本を代表する映画監督の一人、木下恵介(1912~1998)は、1943年に松竹大船から監督デビューを果たし(黒澤明も東宝から1943年に監督デビューしています)、戦後『大曾根家の朝』(1946)『結婚』(1947)等を経て5本目の作品として本作『女』を発表します。1948年はまだ敗戦の傷跡が強く残り、復興途上の段階であり映画製作についてもただならぬ制限と困難が伴っていたと推察されます。世上の人心も決して平穏とは言い難かったようで、この年に公開された黒澤明の『酔いどれ天使』に登場する松永(三船敏郎)の姿は当時の行き場を失った、迷える若者をリアルに描いたものと考えられるでしょう。

さて、この木下作品には、水戸光子と小沢栄太郎という二人の俳優しか登場しないとあっていい作品です。小沢栄太郎の情夫的存在の水戸光子はダンサーを本業とするものの、以前からの腐れ縁のつながりで小沢栄太郎との関係をずるずると引きずっています。小沢はさまざまな犯罪に手を染める小悪人であり、社会のダニ的存在と言っていいでしょう。強盗した金を元手に地方で商売を始めるつもりで、無理やり水戸光子を連れ出そうとしますが、彼女は愛想を尽かしています。小沢の今で言うDVに耐えられず、別れ話を切り出しますが、それを懐柔する小沢の演技の粘着性は悪意を抱かせるほどに見事です。そのあたりの木下恵介の演出力は、その心理描写を始めストーリーテリングの巧さという力量が発揮されます。人間の弱さ、感情の移ろい易さがいくつかのエピソードを交えて描写されるシーン(戦災孤児の登場、トラックの荷台に乗っての道行、熱海での散策などなど)は、木下恵介の感性と美意識の表現でもあります。敗戦と社会の混乱のせいにして悪事を働く小沢は、自らの正当性を訴えますが、それは卑小な人間に自分を貶めるだけであり、敗戦直後の社会の姿のリアリズムの表現であり、イタリアのネオリアリズムと何ら変わりない、時代観察者の鋭い視線であるのです。私たちの知らない時代をこれだけ何ら誇張することなく自然に描写し、そして想像力を引き出してくれる作品は貴重であり、価値あるものとしてフィルムの状態を改善して残していくべきものでしょう。(残念ながらこの頃の木下作品は特に『結婚』(1947)など本当に雨が降っているのかと思えるほど酷く、音質も劣悪な状態で気の毒に思えるほどです)

木下恵介は、1948年に黒澤明のシナリオによる『肖像』と言う秀作を松竹で完成します。(この作品についてはまた改めて)また日本映画界が未曾有の機器的状況に陥った時には、二人に小林正樹・市川崑が加わり「四騎の会」を結成し、活路を見出そうとします。二人は日本映画界を支えた盟友でありました。黒澤明より2歳年下だった木下恵介は、1998年黒澤明が没した3ヶ月後に亡くなります。